

親子における性役割認知の発達的变化

大 瀧 ミドリ*・近 藤 里 恵**

(平成2年6月30日受理)

要 旨

青年期にある親子の役割認知が、子どもの年齢的な発達に連れてどの様に変化するかを明らかにするのが本研究の目的である。対象は小学4年生～高校2年生の男女児童・生徒計545名とその両親である。児童・生徒は現実と理想の行動特性について自己評定し、両親は子どもの現実と理想の行動特性について評定を行い、次の結果を得る。

- 1 子どもによる自己評定には男女ともに明確な発達的变化が認められる。
- 2 母親の評定では男子には明確な発達的变化はあるが、女子にはない。また、父親の評定には男女ともに明確な発達的变化はない。
- 3 女子の理想の行動特性には明確な発達的变化があるが、男子にはない。
- 4 母親が子どもに望む行動特性には明確な発達的变化があるが、父親の場合にはない。
- 5 子どもと両親の行動評定のずれを見ると、小学生におけるずれの方が他の学年のずれよりも大きい。

KEY WORDS

sex-role	性役割	desirability	期待	elementary school student	小学生
discrepancy	ずれ	parent	親	junior school student	中学生
high school student		high school student	高校生		

1. はじめに

現代青年の性役割認知に関する問題として青年による現実自己と理想自己の評定のずれあるいは青年の理想自己と社会規範とのずれが青年、特に、女子の自己概念形成に与えるネガティブな影響が指摘されている。例えば、約20年ほど前になされた柏木¹⁾の結果では、男子よりも女子の方が性役割獲得の過程において多くの葛藤を経験し、『女らしさ』を身につける過程で女子は高い達成を志向する動機を回避するようになるなどの問題が指摘されている。その原因は性役割として社会的に期待される『男らしさ』は人間らしさと矛盾しないのに対して『女らしさ』として期待される行動特性が人間らしさとされる行動特性と矛盾することによるとされている。さらに女性の性役割とされている行動特性は、男性役割とされる行動特性に比べ社会的に低い価値が与えられているために、それを受容すること自体が葛藤の原因となることなどの指摘がなされている。最近、筆者が行った調査²⁾においても、従来から男性役割とされる行動特性

* 生活・健康系教育講座

** 長野県長門町立大門小学校

が女性役割とされる行動特性よりも高い評価を受けており、性役割に関する行動特性に与えられた社会的価値が20年前と基本的に変わっていないことを示している。しかし、子どもが獲得しているとする性役割に関する行動特性の評定における親子のずれを見ると、男子に対しても女子に対しても子どもの自己評定値よりも我が子に対する両親の評定値の方が有意に高く、現実の子どもの行動特性に関する親子の認知のずれは、子どもの性役割行動特性の獲得において深刻な葛藤を生じさせるものにはなっていない。もっとも、性役割行動特性の獲得に伴い子どもが経験する葛藤は、現実子どもが獲得している行動特性の評定における親子の認知のずれよりも、むしろ親が子どもに獲得して欲しいとするものと子どもが獲得したいとするものとのずれによって生ずることが考えられるため、この点から親子の評定のずれを検討すると、男子は『女らしさ』に相当するところの優美性を男子が考える以上に両親から期待され、女子は『男らしさ』に相当するところの行動特性を女子が考える以上に両親から期待されている。つまり、男子は現実の自己評定においても理想の自己評定においても最下位にしている優美性を両親から獲得することを望まれ、女子は優美性よりも上位にある行動性の獲得を期待されており、女子よりも男子の方が強い葛藤を経験しやすい状況に置かれている。このような親子の認知におけるずれは、両親が男子には『女らしさ』を、女子には『男らしさ』を子どもが考えている以上に望むことによって生じているものであり、結果的には男子と女子の『男らしさ』『女らしさ』を解消する方向にずれの効果が働く可能性が示唆される。このような結果に基づいて、本研究では現実と理想の自己の評定について信頼性が確認されている小学校4年生から高校生2年生までの親子を対象とすることによって、先に性役割行動特性の獲得に関して見られた高校生とその両親の現実および獲得期待における評定とそのずれが発達的にどのような方向を持つものであるかを明らかにし、性役割に関する行動特性の獲得における発達的問題について検討する。

2. 方 法

1. 対 象

長野市内の公立小学校・中学校・高校に在籍する児童・生徒計545名とその両親である。対象児童・生徒の詳細は以下の通りである。

小学校4年生	119名	(男子 55名, 女子 64名)
6年生	110名	(男子 54名, 女子 56名)
中学校2年生	139名	(男子 65名, 女子 74名)
高校2年生	177名	(男子 48名, 女子 129名)
計	545名	

なお、回収率は小学生の場合は97%、中学生は95%、高校生は70%、両親は62%であり、上記の対象は子どもと両親の資料が完全に揃っているものである。

2. 方 法

調査票は、子ども票（小学生用、中・高校生用）と両親票の2種類で構成されている。小・中・高校生には性役割に関する行動特性31項目について現実の自己および理想の自己について評定を求める。両親には子ども票と同じ31項目について調査対象になっている子どもの現実の行動特性と親が理想とする行動特性について評定を求める。調査項目は、既報⁹⁾に準拠している

が、今回は小学4年生から調査対象にしたため彼等に理解されにくいと思われる5項目を除いた31項目とする。なお、小学生用の調査項目の意味内容は中・高校生用と同一であるが、その表現は小学生にも理解可能な平易なものに変更する。さらに、中・高校生および両親には「非常に当てはまる」から「非常に当てはまらない」までの7段階評定を求めたが、小学生には「当てはまる」から「当てはまらない」までの5段階評定を求める。

高校生とその両親に対する調査は1987年9～10月、小・中学生とその両親に対する調査は1989年5～6月に行う。小・中・高校生の調査はクラス担当教師の指導のもとに学級内で行う。両親については児童・生徒が調査票を家庭に持ち帰り、後日クラス担当教師に提出する留置法により行う。

3. 結果と考察

1. 因子分析

評定値として7段階の「非常に当てはまる」から「非常に当てはまらない」までにそれぞれ7点から1点までの得点を配し、中・高校生の評定結果に基づいて因子分析を行い、次の3因子を抽出する。各因子に含まれる項目を表1に示す。

表1 因子別項目と負荷量

行 動 性		人 間 性		優 美 性	
たくましい	0.73	思いやりのある	0.75	かわいい	0.65
行動力のある	0.70	心のひろい	0.71	色気のある	0.62
指導力のある	0.66	あたたかい	0.66	おしゃれな	0.61
頼りがいのある	0.66	愛嬌のある	0.53	繊細な	0.57
意思の強い	0.63	誠実な	0.52	静かな	0.50
決断力のある	0.62	明るい	0.50	優雅な	0.49
忍耐強い	0.61	健康な	0.49	柔順な	0.41
冒険心にとんだ	0.61				
自己主張のできる	0.60				
視野の広い	0.55				
自分の生き方のある	0.53				
信念をもった	0.53				
大胆な	0.52				

これらの因子は既報⁴⁾とほとんど同じ項目で構成されている。第1因子は「行動力がある」「指導力がある」「決断力がある」などの行動性の因子とする。第2因子は「思いやりがある」「あたたかい」「明るい」などの項目から人間性の因子とする。第3因子は「かわいい」「繊細な」「優美な」などの項目から優美性の因子とする。これらの3因子を性役割に関する行動特性として以下これらの行動特性に関する発達的变化および親子のずれなどについて検討する。

2. 子どもの自己評定と親による他者評定における発達的变化

因子分析の結果に基づき性役割に関する行動特性である行動性、人間性、優美性を小・中・

高校生はどの位獲得していると考えているかについて見ることにより子どもが現実獲得している行動特性の相対的順位および各行動特性における発達の変化について検討する。

なお、小学生の評定値は他の学年と比較するため7段階評定値に換算する。

(1) 子どもが獲得している行動特性の相対的順位

子どもの自己評定と親による他者評定によって、子どもが性役割に関する行動性、人間性、優美性の行動特性をどのように取り込んでいるか、その順位関係を見る。さらに、それらが子どもの学年や性とどのように関連するかについて検討する。表2は、各行動特性に関する子どもの自己評定と両親による他者評定の平均値を示したものである。

表2 子・父・母の評定の平均値と標準偏差

		男 子									女 子								
		子		父 親		母 親		有 意 差			子		父 親		母 親		有 意 差		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	子-父	子-母	父-母	平均	SD	平均	SD	平均	SD	子-父	子-母	父-母
4 年	行動性	4.0	1.2	4.3	0.9	4.1	0.8				4.0	1.0	4.4	0.8	4.2	0.8	*		
	人間性	4.1	1.1	5.1	0.7	5.1	0.7	***	***		4.6	1.0	5.2	0.7	5.0	0.7	***	***	
	優美性	3.0	1.0	4.0	0.8	3.8	0.7	***	***		3.3	1.1	4.4	0.7	4.2	0.6	***	***	†
6 年	行動性	3.9	1.1	4.2	0.7	4.2	0.7	†			3.8	1.1	4.4	0.7	4.3	0.9	***	***	
	人間性	4.3	0.9	5.2	0.6	5.2	0.6	***	***		4.3	1.1	5.0	0.7	5.1	0.8	***	***	
	優美性	2.6	0.8	4.0	0.6	3.8	0.6	***	***		3.0	0.8	4.3	0.8	4.2	0.8	***	***	
中学生	行動性	4.4	0.9	4.4	0.8	4.3	0.8				4.2	0.9	4.4	1.0	4.2	0.9			
	人間性	4.8	0.9	5.1	0.6	5.1	0.6	*	*		4.8	0.8	5.1	0.9	5.0	0.8	*		
	優美性	3.5	0.9	4.0	0.7	4.0	0.8	***	***		3.7	0.7	4.4	0.8	4.2	0.8	***	***	
高校生	行動性	4.3	0.9	4.5	0.6	4.5	0.9	†			4.1	0.9	4.6	0.9	4.6	0.9	***	***	
	人間性	4.7	0.8	5.1	0.7	5.4	0.8	*	***		4.7	0.9	5.1	0.8	5.2	0.7	***	***	
	優美性	3.6	0.9	4.2	0.7	4.4	0.8	***	***		3.5	0.9	4.5	0.8	4.3	0.7	***	***	

† p<0.10 * p<0.05 *** p<0.001

4年生の男子以外の全ての学年の男子と女子は、現実に自分が獲得しているとする行動特性には人間性>行動性>優美性と有意な順位づけがある。なお、4年生の男子でも人間性と行動性は同順位であり、優美性は最下位となっており、彼等においても人間性の方が優美性よりも上位を占め、この順位関係は全ての学年の男子と女子に共通する傾向であり、現実に子どもが獲得しているとする行動特性の順位には発達の変化および性差はみられない。

両親による評定を見ると、行動特性の順位には評定者、学年、子どもの性による違いがある。しかし、子どもが最も獲得している行動特性は人間性であると認知しており、この順位に関しては評定者、学年、子どもの性による違いはない。それゆえ、両親による行動特性の順位における違いは、2位と3位を占める行動特性の違いによって生じている。男子を持つ父親の評定を見ると小学生では行動性=優美性であるが、中学生と高校生では行動性>優美性となり、学年が進むと優美性は下位に下がる。これは父親の行動性の評定値が中・高校生で有意に上昇す

ることによる。男子を持つ母親の場合は中学生以下では行動性>優美性となっているが、高校生で行動性=優美性となり、父親の評定とは逆の順位になっている。この変化は、優美性の評定値が高校生で有意に上昇することに起因している。このように男子が獲得していると父親と母親が認知している行動特性の順位には発達的变化が認められる。つまり、父親の評定の行動特性の順位関係は子どもの学年が進むにしたがって、従来男性性とされている行動性と女性性とされている優美性が分化してゆく傾向がある。一方、母親の評定では学年が進むに連れ、各行動特性は等価となる傾向がある。

つぎに、女子を持つ父親の評定を見ると、全ての学年で行動性=優美性となっており、男子を持つ父親に認められた性別分化は見られない。女子を持つ母親の場合は中学生以下では行動性=優美性であるが、高校生では行動性>優美性となり、行動性の順位に発達的变化が認められる。このような変化は、高校生に対する行動性の評定値が有意に上昇することに起因している。

父親と母親はそれぞれ同じ我が子について評定しているにもかかわらず、両親の行動性と優美性の相対的順位に違いが見られるが、この違いは両親の評定値における差異と必ずしも一致しないため、次に各行動特性の評定平均値における学年、性、両親、親子の差異について検討する。

(2) 各行動特性における発達的变化

表2を参照しながら各行動特性における発達的变化についてみる。

行動性について：男子・女子共に中学生と高校生の間に有意な学校段階差があり、階段状の発達傾向を示している。各学年における男女差を見ると男子の方が女子よりも高い傾向にあるが、いずれの学年においても有意差はない。

男子を持つ両親の評定を見ると、子どもの学年が進むに連れ父親と母親の評定値は緩やかな上昇を示し、いずれの場合も小学生と高校生の間に有意な学校段階差がある。女子を持つ両親の評定を見ると、小・中学生よりも高校生に対する父親と母親の評定値の方が高い傾向が見られ、特に、母親の場合は中学生と高校生の間に有意な学校段階差がある。両親による評定の差異を見ると、男子を持つ両親間および女子を持つ両親間の評定値はいずれの学年においても有意差はない。親子間の差を見ると、男子と男子を持つ両親との間には有意差は無いが、女子と女子を持つ両親の間には有意差がある。つまり、女子と女子の父親の評定には中学生以外の全ての学年で有意差があり、いずれも父親の評定の方が女子の自己評価よりも有意に高い。また、女子と女子の母親の場合には小学6年生と高校生に有意差があり、両学年共に母親の評定の方が女子の自己評価よりも有意に高い。このように女子を持つ父親と母親のいずれも、子どもが自己評定しているよりも有意に高い行動性を女子が獲得していると認知している。男子を持つ父親と女子を持つ父親の評定を比較すると子どもの性による差は有意ではない。母親の場合も有意差は見られない。

人間性について：男子と女子のいずれにも学年の進行に伴って人間性を獲得するというものが多く、男子の場合は小学生と中・高校生の間に有意な学校段階差があり、女子の場合は小学6年生と中・高校生の間に有意な学校段階差がある。また有意な男女差は小学4年生にある。子どもの自己評定では男子も女子も人間性に関する行動特性は学年が進行するにつれ獲得すると認知している。

男子を持つ両親による評定を見ると、父親の評定値はいずれも学年でもほぼ一定であるが、

母親の場合には中学生と高校生の間有意な学校段階差があり、母親は他の学年よりも高校生の方が人間性を獲得していると評定している。女子を持つ両親の評定値はいずれの学年にも有意差はない。両親による評定の差異を見ると、男子を持つ両親間および女子を持つ両親間には有意差は見られない。親子間の差を見ると、男子と男子を持つ両親の評定は全ての学年で有意差があり、両親の評定の方が子どもの自己評定よりも有意に高い。女子と女子を持つ両親の場合も同様に両親の評定の方が有意に高い。男子と女子を持つ両親のいずれも子どもが考えている以上に我が子が人間性を獲得していると認知している。男子を持つ父親と女子を持つ父親の評定を比較すると子どもの性による差は有意ではない。母親の場合も有意差はない。

優美性について：男子と女子の自己評定値は学年の進行に伴って波状上昇を示し、小学生と中学生の間に有意差があり、男子・女子とも小学6年生が谷になっている。男女差を見ると、全体的に女子の方が高い評定値を示しているが、有意な男女差が見られるのは小学6年生のみである。

男子を持つ両親について見ると、父親の評定値はいずれの学年においてもほぼ一定であるが、母親の場合は、子どもの学年進行によって上昇する傾向があり、特に、小学生・中学生と高校生の間に顕著な差異があり、中学生以下よりも高校生男子を持つ母親の方が子どもが優美性を獲得していると認知している。女子を持つ両親について見ると、全ての学年で父親の評定値も母親の評定値もほぼ一定であり、発達の変化は見られない。両親による評定の差異を見ると、男子を持つ両親間および女子を持つ両親間には有意差はない。親子間の差異を見ると、男子と男子を持つ両親の評定は全ての学年で有意差があり、いずれの学年においても両親の方が有意に高く、女子と女子を持つ両親の場合も同様に両親の評定の方が有意に高い。優美性についても父親や母親は子どもが自分で獲得していると認知しているよりも多くの優美性を子どもは身につけていると認知している。男子を持つ父親と女子を持つ父親の評定を比較すると女子を持つ父親の方が、優美性を高く評定し、特に、小学4年生と中学生に有意差がある。同様に、母親の評定を見ると高校生以外の学年で女子を持つ母親の方が有意に高く評定し、小学生では有意差がある。このように父親と母親にとって優美性は生物学的な性、特に女性性と結びつけて受け止められている。しかし、その差は高学年よりも低学年の方に顕著に見られる。

以上、発達の視点から性役割に関する行動特性を子どもがどの程度獲得しているかを子どもの自己評定と両親による他者評定によって見る。男子も女子も自己評定ではいずれの行動特性も学年の進行に伴って発達のな上昇傾向を示すことが明らかになる。特に、子どもの評定では行動性の獲得の節目は中学生と高校生の間にあり、人間性と優美性の獲得の節目は小学生と中学生の間にあることが明らかになる。一方、父親による評定を見ると、男子の行動性の獲得状況には学年進行に伴う発達的な変化があると認知しているが、その変化は小学生から高校生にかけて漸増するため明確な節目は見られない。また、女子についてはいずれの行動特性についても学年進行に伴う発達の変化はない。母親の場合は、男子に対していずれの行動特性の獲得にも発達の変化があると認知しているが、女子に対しては行動性の獲得にのみ発達の変化があると認知しており、男子と女子に対する違いがある。母親の認知によって男子の行動特性の獲得の節目を見ると、行動性の節目は父親の場合と同様に小学生から高校生にかけて漸増するため明確でないが、人間性と優美性の節目は、中学生と高校生の間にある。また、女子の行動性の節目は、中学生と高校生の間にある。伊藤⁵⁾は、中学を性役割の萌芽期として高校で男女差がより明確になるとしているが、本結果からは現実に子どもが獲得している行動特性における明

確な男女差は高校生よりもむしろ中学生の時期にあることが示唆される。しかしながら、行動特性の獲得の節目については、子どもの自己評定と両親による評定では異なっており、子どもの行動特性の獲得状況を認知する場合には子どもの生活年齢情報が重要な意味を持っていることが考えられる。それゆえ、親子間における行動特性の獲得の節目の違いは、子どもの年齢に対する性役割的な意味づけが親子間で異なっていることの影響が示唆される。

また、子どもの自己評価に関して有意な男女差が見られたのは、人間性と優美性であり、前者は小学4年生、後者は小学6年生であり、男女差は高校生よりも小学生の方に大きい傾向が伺われる。また、男子を持つ父親と女子を持つ父親の評定における男女差および男子を持つ母親と女子を持つ母親の評定における男女差について見るといずれも男女差は優美性にのみ見られ、父親の場合はいずれの学年においても男子よりも女子に対して比較的高い評定値を示している。一方、母親の場合も優美性はいずれの学年においても女子の方が比較的高い評定値を示し、低学年の方で男女差が大きい。このように自己評定および父親や母親による他者評定においても男女差は性役割認知が確立すると言われる青年期においてよりも早期の小学生の方にある。また、優美性について中・高校生における男女差を見ると子どもの自己評定や母親の評定よりも父親の評定の方に大きく、父親の評定の根底に性役割に関する行動特性を生物学的な性と結び付ける傾向にあることが示唆される。

3. 子どもが獲得する行動特性に対する子どもと両親の期待

子どもは、性役割に関する行動特性についてどのような獲得期待を持ち、また彼等の両親は我が子にそれらの行動に対してどのような獲得期待を持っているかを明らかにし、獲得期待に

表3 子・父・母の期待の平均値と標準偏差

		男 子									女 子								
		子		父 親		母 親		有 意 差			子		父 親		母 親		有 意 差		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	子-父	子-母	父-母	平均	SD	平均	SD	平均	SD	子-父	子-母	父-母
4 年	行動性	5.9	1.1	5.9	0.9	6.0	0.7				5.9	0.9	5.5	1.0	5.7	0.8	*		
	人間性	5.8	1.0	6.1	0.8	6.3	0.5		***		6.2	0.7	6.1	0.9	6.4	0.6		†	*
	優美性	4.0	1.1	4.4	0.7	4.3	0.6	*	*		4.6	1.1	5.1	0.9	5.1	0.8	*	**	
6 年	行動性	6.1	0.7	6.0	0.8	5.8	0.9		*		6.1	0.7	5.3	0.8	5.8	0.7	***		***
	人間性	6.0	0.6	6.2	0.6	6.1	0.8				6.3	0.5	6.0	0.8	6.3	0.6	*		*
	優美性	3.9	0.9	4.5	0.8	4.3	0.7	***	*		4.5	0.9	4.9	0.8	5.0	0.8	*	***	
中学生	行動性	5.7	0.8	5.9	0.8	6.0	0.7		†	***	5.1	0.8	5.5	0.9	5.5	1.0	*	**	
	人間性	5.9	0.9	6.1	0.7	6.3	0.6		**	†	6.1	0.7	6.1	1.0	6.1	0.9			
	優美性	4.1	0.8	4.5	0.7	4.6	0.7	***	***		4.8	0.8	5.1	1.0	4.9	0.9		†	
高校生	行動性	5.9	0.9	6.0	0.8	5.9	1.0				5.3	0.8	5.5	0.7	5.6	0.7	*	***	
	人間性	6.1	0.8	6.0	0.8	6.1	0.8				6.4	0.6	6.1	0.7	6.2	0.7	***	*	
	優美性	4.2	0.6	4.6	0.9	4.5	1.0	**	†		4.9	0.9	5.1	0.8	5.2	0.8	†	**	

†p<0.10 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

おける発達的变化および親子の獲得期待におけるずれについて見る。さらに、発達の視点から青年期における性役割に関する行動特性を獲得する問題について検討する。

(1) 獲得期待における行動特性の相対的順位

子どもは自己の行動特性として性役割に関する行動特性をどの程度獲得したいと望み、また両親は我が子にどの程度獲得して欲しいと望んでいるかについて見たのが表3である。

それぞれの行動特性を獲得したいとする順位を見ると、男子ではいずれの学年においても人間性と行動性を最も獲得したいとし、優美性は最下位になっている。一方、女子の場合も全ての学年で優美性が最下位を占めているが、人間性と行動性の順位は学年により異なっている。すなわち、小学生では人間性＝行動性であるが、中・高校生では人間性＞行動性となり、発達的变化が認められる。この変化は中・高校生の行動性に対する獲得期待が小学生に比較して極端に減少することによって生じている。これはいわゆる男性性とされる行動性に対する獲得期待が発達的に減少することを意味しており、女子の獲得期待における発達的变化の要因として性別分化が関係していることが示唆される。ところで、優美性は、男子・女子共に獲得期待において最下位を占めており、子どもの優美性に与える社会的価値が他の行動特性よりも低く、他の結果⁶⁾とも一致するものである。

両親が子どもに獲得を期待する行動特性の順位を見ると、男子に対する父親の期待はいずれの学年でも行動性と人間性を優美性よりも有意に望ましいものとしている。母親の場合も優美性が最下位であることは各学年に共通しているが、人間性と行動性の順位については、小学4年生と中学生では人間性＞行動性であり、小学6年生と高校生では人間性＝行動性となっており、学年の進行と獲得を期待する行動特性の順位の間には一義的關係はない。父親と母親が女子に獲得して欲しいとする行動特性の順位は、いずれの学年においても人間性＞行動性＞優美性となっており、両親の獲得期待は子どもの年齢による変化はない。優美性は両親が子どもに獲得を期待する行動特性の最下位を占めており、両親も他の行動特性に比較して優美性に低い評価を与えている。両親が我が子に最も望む行動特性を見ると、父親は男子に人間性と行動性を期待し、女子に人間性を期待し、母親は男子に学年により人間性と行動性もしくは人間性を期待し、女子に人間性を期待している。このように両親の我が子に対する行動特性の獲得期待の順位には男女差があり、そこには性別分化の関与が推察される。

(2) 各行動特性の獲得期待における発達的变化

表3を参照しながら各行動特性の獲得期待における発達的变化を見る。

行動性について：男子と女子の獲得期待は、学年進行に伴い下降する傾向があり、特に、小学生と中学生の間に有意な減少が見られ、行動性の獲得期待には発達的变化がある。また、各学年における男女差を見ると、中学生と高校生に有意な男女差があり、中・高校生の女子では男子に比較して行動性の獲得期待が顕著に減少する。つまり、行動性の獲得期待における男女差は学年の進行により増大する傾向がある。

両親について見ると、男子に対しても女子に対しても父親と母親の獲得期待には有意な学年差はない。両親の獲得期待における差を見ると、男子を持つ両親間にはいずれの学年においても有意差はないが、女子を持つ両親間には小学6年生に有意差があり、母親の方が父親よりも女子に有意に高い獲得期待を持っている。親子間の差を見ると、男子とその父親の間にはいずれの学年においても有意差はないが、男子とその母親の間には小学6年生と中学生に有意差が見られる。小学6年生では母親よりも子どもの方が有意に高い獲得期待を持ち、中学生では母

親の方が子どもよりも有意に高い獲得期待を子どもに対して持っている。女子とその父親の間には全ての学年に有意差があり、小学生では女子の獲得期待の方が有意に高く、中学生以上では父親の子どもに対する獲得期待の方が有意に高い。女子と母親では中学生と高校生に有意差があり、いずれも母親の方の獲得期待が有意に高い。男子と女子の父親について見ると、全ての学年で有意差があり、いずれも男子の父親の方が有意に高い獲得期待を男子に対して持っている。男子と女子の母親について見ると、小学6年生以外の全ての学年に有意差があり、いずれも男子の母親の方が有意に高い獲得期待を持っている。つまり、男子を持つ両親の方が女子を持つ両親よりも行動性に対して高い獲得期待を持っており、これは行動性が男性性と受け止められていることを意味している。

人間性について：男子の獲得期待には有意な学年差はない。女子の場合は中学生と高校生の間に有意差があり、高校生の方が有意に高い獲得期待を持っている。また、各学年の獲得期待における男女差を見ると、中学生以外の全ての学年に有意差があり、いずれの学年においても女子の方が高い獲得期待を持っている。しかし、男女差はほぼ一定しており、学年進行に伴う発達的变化はない。

男子を持つ両親について見ると、男子に対する期待には有意な学年差はない。女子を持つ両親について見ると、父親の期待には有意な学年差は無いが、母親の場合は小学生から中学生にかけて獲得期待が減少する傾向があり、特に、小学4年生と中学生との間に有意な学年差がある。つまり、母親は人間性の獲得を中学生よりも小学生に多く期待している。両親間の差異を見ると男子を持つ両親の期待には有意差はないが、女子を持つ両親間に小学4年生と6年生に有意差が見られ、父親よりも母親の方が女子に人間性の獲得を期待している。親子間の差を見ると、男子とその父親の間にはいずれの学年においても有意差はないが、男子とその母親の間には小学4年生と中学生に有意差があり、いずれも母親の方が子どもに対して有意に高い獲得期待を持っている。女子とその父親の間には小学6年生と高校生に有意差があり、いずれも子どもの方が有意に高い獲得期待を持っている。女子とその母親の間には高校生にのみ有意差があり、子どもの方が有意に高い獲得期待を持っている。男子と女子を持つ父親および男子と女子を持つ母親について子どもへの獲得期待差を見るといずれの学年にも有意差はなく、人間性に関しては父親も母親も男子と女子に等しく獲得して欲しいと考えている。

優美性について：男子と女子の獲得期待には学年の進行に伴う上昇傾向があり、特に、女子の場合には小学生と高校生の間に有意差があり、小学生に比較して高校生の方が優美性を自己の行動特性として獲得したいとしている。また、全ての学年において有意な男女差があり、いずれも女子の方が有意に高い獲得期待をもっている。男女差は小学生の方が中・高校生よりも大きく、学年進行により男女差は減少する傾向がある。

男子を持つ両親について見ると父親の獲得期待には有意な学年差はないが、母親の場合には小学生と中学生の間に有意差があり、母親は小学生よりも中学生の方に優美性の獲得を期待している。女子を持つ両親の期待を見ると父親には有意な学年差はないが、母親は中学生よりも高校生に優美性の獲得を有意に期待しており、母親の期待には発達的变化がある。男子を持つ両親間および女子を持つ両親間の獲得期待には有意差はない。親子間の差を見ると、男子とその父親の間ではいずれの学年でも有意差があり、父親の方が子どもに対して有意に高い獲得期待を持っている。男子とその母親の場合は高校生以外の学年で有意差があり、いずれも母親の方が子どもに対して有意に高い獲得期待を持っている。女子とその父親について見ると小学生

に有意差があり、父親の方が子どもに対して有意に高い獲得期待を持っている。女子とその母親の場合には中学生以外に有意差があり、いずれも母親の方が子どもに対して有意に高い獲得期待を持っている。男子と女子を持つ父親および男子と女子を持つ母親の獲得期待差を見るといずれの学年にも有意差があり、父親も母親も男子より女子の方に優美性を獲得することを期待している。

以上、子どもの性役割に関する行動特性の獲得期待について子どもと両親の認知を見る。男子は人間性と行動性を同じくらい身に付けたいと望んでおり、女子の場合は低学年では人間性と行動性に対する獲得期待の差はさほど鮮明ではないが、高学年になると行動性よりも人間性を身に付けたいと望み、行動性に対する獲得期待が顕著に減少する。このような獲得期待における発達的变化には、多分に女子における性別分化の影響が考えられる。男子にはこのような発達的变化が見られない理由として、行動性は従来からいわれている男性性に対応する行動特性であるために、男子は性別分化の有無により行動性に対する獲得期待が影響されることが少ない可能性が指摘される。また、獲得期待における評定者間のずれを各行動特性の各学年における有意なずれの数とすることで見れば、男子に対するよりも女子に対する評定者間の方が多くのずれが見られる。また、ずれの意味について見ると、男子はいずれの学年においても父親と母親から優美性について子どもが望むよりも有意に高い獲得期待を受けており、この行動特性が他の行動特性に比較して低い価値が与えられているものであることを考慮すると、葛藤を経験する可能性が示唆される。女子の場合は、優美性を自分が望む以上に両親から獲得することを期待され、人間性に対する獲得期待は子どもの方が両親よりも高く、女子の場合は両方向のずれを体験している。このような複雑なずれの体験が女子の自己概念の形成にどのような影響を与えるかについては今後更に検討される必要がある。柏木⁷⁾の指摘から親子間のずれは、子どもの年齢的な発達に伴って増大することを仮定していたが、ずれの発達的变化については顕著な傾向はない。男子と女子に対する親の獲得期待における違いを見ると、両親はともに小学生から高校生まで男子には行動性を女子に対してよりも期待し、女子には優美性を男子よりも期待すると言うように生物学的性と行動特性における獲得期待との関係がいずれの学年においても明確にある。子どもの場合は小学生では人間性と優美性に性差があり、女子の方の獲得期待が高い。中・高校生では行動性と優美性に性差があり、行動性は男子に、優美性は女子の方に高く、高学年の方で行動特性と生物学的性との関連がより明確となる。

このように獲得期待における行動特性の順位性を明確にしたまま子どもの中に生じている男女差の発達的变化は、行動特性の劣位性と女性性が結び付けられる危険性を含んでおり、行動特性の価値づけに多様性をもたせるような教育的配慮の必要性が指摘される。

4. おわりに

既報⁸⁾の高校生とその両親を対象とした研究に基づいて、本報告では思春期から青年期までの子どもを対象として性役割に関する行動特性の獲得過程における発達的变化を子どもの自己評定と親の他者評定によって明らかにすることを目的とした。その結果、子どもの自己評定では実際の行動レベルにおける性別分化は従来指摘されているよりも速い年齢段階で生じていることが明らかとなる。しかし、親による他者評定ではその様に速い時期に子どもの性役割に関

する行動に性別分化が生じているとはとらえていない。特に、父親の場合は子どもの年齢的な発達によって子どもが現実獲得していると認知している行動特性の変化をとらえていない。このような父親の評定における発達的な不変性は、一般に言われているような父親と子どもとの接触の少なさに起因するとも考えられるが、我が子に関する父母の評定にはほとんど有意差が見出だされないことを考慮するならば、それ程、父親の子どもの行動特性に関する評定が逸脱したものとも思われない。父親が子どもに獲得して欲しいと思っている行動特性についての評定にも、子どもの年齢的な発達による変化は見られず、いずれの年齢の子どもに対しても行動特性間には明確な順位が存在する。この順位には、子どもの性による違い、つまり、男子と女子に対する違いが明確であり、父親が子どもに対してもつ行動特性の獲得期待は、子どもの年齢よりも性によって大きく規定されていることを示している。父親による子どもの行動特性の理解の仕方は年齢的なものよりも生物学的な性に規定されているように思われる。このような認知方式をとる父親の存在は子どもの性役割に関する行動特性の獲得にどのような影響を持つのであろうか。この点に関しては今度、明らかにされる必要がある。その場合、父親自身の性役割に関する行動特性に対する認知の過程そのものも明らかにされる必要がある。

子どもが性役割に関する行動特性を獲得していく過程で、女子の場合には中・高校生で従来から男性性とされてきた行動性の獲得期待を極端に減少させることが明らかになったが、ここでいう行動性には「行動力がある」「指導力がある」「決断力がある」などが含まれており、これらは行為者そのものがアクティブに自らが行動の担い手になる為に必要とされる行動特性で構成されている。これらの行動特性に対する獲得期待を青年期に女子が極端に減少させることは、女子の生き方そのものを受け身的なものにすることにもなりかねない。その意味では性別分化がそれ程まだ明確になっていない小学校段階から行動特性の獲得に対する適切な配慮がなされる必要がある。

調査にご協力戴いた長野市立三輪小学校、古里小学校、東北中学校、東部中学校、長野県立西高等学校、東高等学校の児童・生徒の皆さんとそこご両親、そして調査の機会を与えて下さいました校長先生とクラス担任の諸先生に衷心より感謝申し上げます。

なお、資料の集計・分析には JEPS を使用した。

注

- 1) 柏木恵子 青年期における性役割の認知Ⅲ 教育心理学研究 22, 4, 1-11, 1974
- 2) 大瀧ミドリ 近藤里恵 青年期の親子における性役割認知のずれ 上越教育大学研究紀要 8, 3, 115-128, 1989
- 3), 4) 前掲書 2)
- 5) 伊藤裕子 秋津慶子 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究 31, 2, 45-50, 1983
- 6) 柏木恵子 子どもの自己の発達 東京大学出版会 1983, 前掲書 5)
- 7) 前掲書 6)
- 8) 前掲書 2)

Development and Change of Children's and Their Parents' Cognition of Sex-Roles

Midori OTAKI and Rie KONDOU

ABSTRACT

The purpose of this study is to examine how children's and their parents' cognition of sex-roles change depending on the children's development. The subjects are 545 male and female students, and their parents. The students self-evaluated their sex-role attitude and its desirability, parents evaluated their children's sex-role attitude and its desirability from their stand point. Also elementary school students and junior high school students guessed how they would be evaluated by their parents.

The results are as follows:

1. In the self-evaluation, clear progressive change takes place in the both genders.
2. In the mothers' evaluation, there is clear progressive change acknowledged in their sons.
3. Regarding the sex-role attitude which the students think desirable, there is clear progressive change in the female students.
4. The sex-roles which the mothers think desirable for their children does show a progressive change.
5. The evaluation discrepancy between the children and their parents is the biggest in elementary school students compared with the other student groups.